

学び

’learning‘

松崎良美（社会学）
MATSUZAKI, Yoshimi (Sociology)

「学び」という言葉から連想するのはどのようなものだろう。「学び舎」という表現もあるとおり、学校を連想することもあるかもしれない。一方で、仕事も含めた日々の営みを通じて、「学ぶことがあった」と回顧する経験を持った人もいるだろう。そもそも「学び」とは、何者かによって権威的に規定されるものではなく、経験する本人の解釈次第でさまざまな内容、事柄が柔軟に該当してしまうようなもの——いわば、人が社会のなかでその人らしくかわり、よりよく生きていくために必要な知恵——“生の技法”を獲得していくことと表現するのが妥当と思われるようなものだ。

「学び」の根源的独占としての「教育」

宮本常一（1984）は、生まれ育った地域で父母から受けた教えを回顧するが、その教えはコミュニティの中で生きていくうえで重要なものの考え方やふるまい方に近い。一方で、障害者が家族や施設から脱し、自立生活を指向する過程の中でも、試行錯誤を経て自律的に生きていくための技法が生み出されてきた（安積ら 2011）。それぞれが固有の身体を持ち、さまざまな生まれや育ちの背景を持つからこそ、人がみずからにとって必要と信じるに足る学びのありようもまた、個性のある多様なものになり得る。そのとき、「学び」とは、単なる知識の習得としてのみ捉えることはできない。それは、試行錯誤の実践を通じて、心身になじませ、定着させ、血肉化していくような行為だ。そして、その過程を客観的に記述することは困難だ⁽¹⁾。いわんやその過程を標準化して測定可能なものにするをや。

一方、文部科学省（2021）は学習指導要領で「生きる力」を掲げ、主体的で対話的な学びを重視し、学校内外での取り組みにも取り入れるよう方針を示してきた。そして、教える者は、学ぶ者の「主体的に学習に取り組む態度」を評価するようになった。学校

における「学び」の主導権は、「学ぶ」側から「教え・育てる」側にすっかり転倒してしまったようだ。

イリイチは、学ぶことが「教育」と定義されなおされたことによって、学校が学ぶことへの根源的独占を拡張してきたと指摘する（2015: 122-123）。「学び」のありようが一元化され、個人の自律性も制限されることになっていったと指摘したものだ。

学びの一元化をさらに強固にしたのは、体系化・組織化され、標準化された学びが、測定され、客観化・評価されることで、その後の人生がおおかた決まってしまう、という“前提”が広く共有されるようになったことが挙げられる。現実には、高得点を得ること、見栄えの良い学歴を持つことは、より高所得の職業に就くことと相関するわけで、学び、もとい教育は、メリトクラシー社会⁽²⁾をより強固な現実としていく機能を持った装置に化したといえよう。「私という人間が、私として、社会にどう在ることができるか」といった個人の自律性に基づく「学び」よりも、現実社会を生き抜いていくためには、わかりやすく得点や学歴で武装することが求められるようになった、と言っては言い過ぎだろうか。

「教育」という市場のゲームからおりて生きること、学ぶこと

令和5年度の文部科学省の「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によれば、不登校児童生徒数は11年連続で増加傾向にある。不登校状態にある小・中学生、高校生について把握した事実として最も多かったのは、「学校生活に対してやる気が出ない等の相談があった」であったという⁽³⁾。不登校児数が急増した背景の一つとして、新型コロナウイルス感染症拡大があったという指摘もある（読売新聞オンライン 2024年10月31日「不登校の小中学生が過去最多34万人超… コロナ禍で急増し、その後も増え続ける」）。当時、学校は休校措置を余儀なくされ、段階的に再開された学校も、私語を禁じられたアクリル板の衝立越しに授業が展開されるような有様であった。子どもたちにとって、ストレスfulな環境であったことは確かだ。ただ、その中で大真面目に議論されていたのは、学校が休校になったために授業時数が不足してしまった問題をいかに解決するか、といった問題だった（NHK 2020年6月2日「夏休み短縮や学校行事の中止相次ぐ 実施へ工夫も 新型コロナ」）。夏休みを短縮させて埋め合わせ、学校で取り扱う余裕がないからと家庭学習で済ませてしまう単元や内容（漢字学習など）もあった。学校が守ろうとしたのは、「学び」というよりも、既存の「教育」という制度、しくみであったのではないか。

不登校児童・生徒の急増を受けて、さまざまな対策もとられはじめている。そもそも、不登校児童・生徒を「学校に連れ戻す」ことが正解とはいいがたい、という理解から「登校拒否」から「不登校」と、児童生徒が学校を休みがちになる状況を示す表現も変化して

きた（前島, 2016）。学校という空間に問題があるのであれば、学校に無理に戻ってこななくてもいい。ただし、“学び”の機会は保障されねばならない——そうした位置づけで「COCOLO プラン」⁽⁴⁾の運用も始まった。さまざまな事情で学校に通えなくなってしまった子どもたちが、自宅も含めた学校外の場所で取り組む努力を成績評価に反映させられるよう、一人一台端末の体制を活用させることも重要な要点とされたのもその一例だ。「チーム学校」体制の名のもとで、様々なアクターが連携して子どもたちと向き合っているのだともいう。

このように学校とかかわりつづけるための仕組みは、多様に整えられつつある。言葉を換えれば「学校」というコミュニティの拡張ともいえようか。重要で大切な取り組みといえる。しかしそこには、日本社会という「しくみ」を維持するためのものといった思惑もうかがえる。「不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方」（令和5年11月17日付初等中等教育局長通知 別紙）には、以下のように言及されている。

不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味を持つことがある一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することに留意すること。

現在の日本社会が子どもたちに示すのは、「教育機会を逸すると、将来の可能性を潰しかねない」という現実だ。裏を返せば「学校に連れ戻す」ことはしなくとも、受験や就職活動など「教育」という“市場”へ復帰させることが、社会にとっての至上命令となっているようだ。

「学校」は、知識提供の場でしかないのだろうか。自分という人間のありようを、悲喜こもごものプロセスの中で悶々と熟考し、希望あるいは悔しさを燃料にして心身を鍛える、「知」と結びつけられた一つの場としての「学校」も確かに存在していたのではないか。しかし「学校」での経験が、点数などの評価に回収され、それがシステムとして強固なものになっていくと、相対的に個人の経験は取るに足らない追憶に堕ちてしまう。客観的評価が低ければ、「学校」での経験は簡単に「敗北」と烙印されてしまいかねない。「教育」という市場——なるべく高い得点を取り、「合格」を勝ち取る——で有利にふるまえる場合は、その“ゲーム”に没頭することもできるかもしれない。しかし、みずからにとって必要な学びになっていなければ、それは「生きる」こととは切り離された肩書にとどまらざるを得ないこともあり得る。

自立共生的道具とは、それを用いる各人に、おのれの想像力の結果として環境をゆたかなものにする最大の機会を与える道具のことである。産業主義的な道具はそれを用いる人々に対してこういう可能性を阻み、道具の考案者たちに、彼ら以外の人々の目的や期待を決定することを許す。（イリイチ 2015: 59）

“ゲーム”に没頭できない者が、不登校という形でゲームから降りようとするとき、社

会に求められているのは、ゲームに復帰するよう仕向けること以外にあるのではないか。人びとが頼りあい、かかわりあいながら暮らす社会の中で、より豊かに生きていくことができるような知恵のようなものとして親しまれ、深められ、鍛えられてきたものとして「学び」を捉えなおすことはできないか——。私たちが共に生きていく社会のありようを思い描き、それを適えるための自立共生的道具として「学び」をどう位置づけなおすことができるか——そのことが今、求められている。

注

- (1) リチャード・セネット著『クラフツマン』における「学び」は、まさにモノと対峙し、身体を通じて体得していく知の実践である。
- (2) 個人の努力や能力がある指標に基づき可視化され、それに基づいて評価され、社会的な地位や報酬を得る仕組み。本稿の文脈に基づけば、学歴至上主義とも説明できよう。
- (3) 小・中学生で32.2%、高校生で32.8%が該当。小・中学生は「不安・抑うつ」の相談があった(23.1%)、「生活リズムの不調に関する相談があった」(23.0%)が続き、高校生は「生活リズムの不調に関する相談があった」(26.7%)、「不安・抑うつ」の相談があった(16.7%)が続いている。
- (4) COCOLO は、Comfortable, Customized and Optimized Locations of learning の略。https://www.town.ami.lg.jp/cmsfiles/contents/0000000/306/R05T02_siry03-03.pdf

参考文献

- イリイチ、イヴァン (2015) 『コンヴィヴィアリティのための道具』、渡辺京二・渡辺梨佐訳、筑摩書房
- 柴田邦臣 (2022) 「新しい『サイエンス』の時代へ、ようこそ 大学における MDASH の意味と『科学の三条件』」、『現代思想』vol.50-12: 169-181.
- セネット、リチャード (2016) 『クラフツマン 作ることは考えることである』、高橋勇夫訳、筑摩書房
- 中央教育審議会 (2015) 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf
- フーコー、ミシェル (2004) 『ミシェル・フーコー講義集成 〈11〉「主体の解釈学」(コレージュ・ド・フランス講義 1981-82)』、廣瀬浩司・原和之訳、筑摩書房
- 堀尾輝久 (2017) 「人間にとって学ぶとは—教育の根源を問う—」、『総合人間学 11』, 61-87.
- 前島康夫 (2016) 「登校拒否・不登校問題の歴史と理論—学校に行かない・行けない子どもの言説史—」、『東京電機大学総合文化研究』14, 23-47
- 松崎良美 (2024) 「漢字学習が拓く『生きること』と『学び』の接続」『総合人間学 (オンラインジャーナル)』18(2), 137-150.
- Yoshimi Matsuzaki, Kuniomi Shibata (2021) *Learning Crisis (1) School Closure and Learning Crisis of Special Education by COVID-19* “Conference Proceedings of the 36th Annual Pacific Rim International Conference on Disability & Diversity” 17(3)
- 宮本常一 (1984) 『家郷の訓』、岩波文庫

関連 KW リテラシー (literacy)、自立共生的道具 (convivial tool)、生の技法 (Ars Vivendi)